

津波避難訓練と防災講演会

一人ひとりが自立した行動で災害から身を守る



徒歩で避難所に向う住民ら

10月4日、津波避難訓練が、津波ハザードマップで示している本町地区の浸水想定区域を対象に実施され、同区域の住民63人と町職員ら計約200人が参加し、避難所への経路や各業務分担の確認を行いました。

訓練は、十勝沖地震を震源とする震度4の地震が発生し、大津波警報が発令されたことを想定。9時から緊急地震速報、9時3分より大津波警報が発令されたことを防災行政無線で放送し、消防のサイレンの吹鳴がそれに続きました。

参加住民らは、放送を受けて、母と子の館、虻田中学校、虻田小学校の3カ所の避難所に徒歩で向かいました。

母と子の館に集まった住民は「坂道を上がるのはこわいけど、万が一のために訓練は必要」と話し、支援者は「坂道でたいへんなので、お年寄りを支える体制が必要」と話していました。

一方、虻田小学校に避難した住民は、「心構えを強く持った方がよいので、こういう訓練はやったほうがよい」「最初にサイレンを鳴らしてもらったほうがわかりやすい」などの意見が寄せられました。

訓練後、洞爺湖文化センターで、防災講演会を開催し、町民や町職員、消防関係者ら250人が参加しました。

講師は、東日本大震災の際に津波犠牲者が少なく、「釜石の奇



自立した行動の大切さを説く片田敏孝教授

跡」と言われた釜石市の防災教育を、8年間指導してきた群馬大学の片田敏孝教授で、「学校・家庭・地域で取り組む命を守る防災」と題して行われました。

片田氏は、始めに、御嶽山の噴火や大雨による土石流の災害など、最近の自然災害を例に「今、改めて僕らは自然とどう向かいあうのか。そして命を守るということに対してどういう姿勢でいなければならぬのかということだが、本当に問われている状況にあるのではないかと参加者に問いかけました。

釜石での実践については、三陸では、必ず津波が来ることが分かっているにも関わらず、子どもらに「立派な堤防があるから逃げない」と言われた経験を

原点に防災教育を始めていったことを述べ、「生き残ること。地域から一人も死者をださない防災教育」をめざし、そのため自ら考えることの大切さを押し進めていった結果、リヤカーで人を乗せての訓練や高齢者に安否札を配布するなど、子どもたちによる主体的な行動が生み出されていったことを紹介しました。

実際に東日本大震災では、中学生が「津波がくるぞ」と叫びながら、小学生の手を引き、高齢者に声をかけて、いっしょに高台に避難したことを、写真や映像を見せて説明しました。

「津波でんでんこ」についても、三重県尾鷲市での小学校の防災教育の実践例を紹介。小学校低学年女兒が自分の家庭で「自分一人で逃げないとお母さんが迎えに来てお母さんが死んでしまう」と話し、父親が「必ず迎えに行くから絶対に死なないと約束する」と話しをする家族の光景の映像を見せ、「でんでんこは、家族の絆を切ることではない。一人ひとりが自立して信頼しあう。それを事前にみんなで話し合うことではないか」と家族の信頼の上に成立することを強調しました。